朱熹『易学啓蒙』研究序説（4）

～安東省菴の研究～

伊香賀　隆

本稿は、「朱熹『易学啓蒙』研究序説（1）（2）（3）～安東省菴の研究～」（東洋学研究、第五十二～五十四号、平成二十七～二十九年）の続稿である。これまで、安東省菴編『啓蒙難解』（※）（朱熹『易学啓蒙』についての注釈書を集大成したもの）の「巻之上」「巻之中」及び「巻之下」の前半部分について報告を行ったが、今回は「巻之下」の後半部分を取り上げる。「巻之下」は、『易学啓蒙』巻之三「明蓍策第三」「考変占第四」についての注釈であり、省菴は本文を三十三章（条）に分けてそれぞれに解説を付しているが、今回は十五条（『易学啓蒙』「明蓍策第三」「至於陰陽老少之所以然者」条：『啓蒙難解』「巻之下」三十五丁）以降の報告であり、本稿をもって全四回の報告を完了する。今回取り上げる「巻之下」は、「巻之上」「巻之中」と同様、収録されている注釈は『易学啓蒙補要解』（『性理大全』に補解・要解を付して整理したもの）が中心であり、それを補足するような形で『啓蒙伝疑』が引用されている。なお本文で引用する諸本の巻数・丁数などは以下のテキストによる。

和刻本『易学啓蒙補要解』（刊記ナシ、九州大学中央図書館蔵〔近藤文庫・逍遥文庫・樋口文庫、全て同版〕）

和刻本『啓蒙伝疑』（寛文九年刊、内閣文庫本）

（※）安東省菴の自筆稿本『啓蒙難解』は、現在、柳川古文書館（福岡県柳川市）に寄託・保管されているが（伝習館文庫　安国七〇―一）、平成二十六年三月に『安東省菴集・翻字編』（柳川文化資料集成第二集、柳川市史編集委員会）が刊行され、『啓蒙難解』もその「影印編補遺」に収録されている。筆者の本稿における研究は、その解題執筆に協力したことに始まるものである。

《『啓蒙難解』巻之下の構成と概略》

（十五）「至於陰陽老少之所以然者」条　三十五丁裏～三十八丁表

（丁数は『啓蒙難解』巻之下）

〔易学啓蒙〕「**至於陰陽老少之所以然者、則請復得而通論之、蓋四十九策、除初掛之一而為四十八、以四約之為十二、以十二約之為四。……自陰之極而退其掛扐、進退過揲、各至于三之一、則為少陽**」。

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）→『啓蒙伝疑』

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三、三十二丁裏～三十七丁裏）

「朱子曰、老陽掛扐之数十二而老陰二十四……」（三十五丁裏九行目）から「……而二少也。一分措四数言」（三十八丁裏二行目）まで。※丁数は『啓蒙難解』巻之下、以下同じ。

〔概要〕朱子：掛扐の数は老陽十二・老陰二十四、過揲の数は老陽三十六・老陰二十四で、二老（老陽・老陰）の差はそれぞれ十二となり、これを三分すると四となる（「**二老者、陰陽之極也、二極之間相距之数凡十有二、而三分之**」）。掛扐の数において、少陰十六は老陽十二を「四」進めたものであるが、この四は二老の差（「**相距之数**」）の十二の三分の一（「**三之一**」）である。過揲の数において、少陰三十二は老陽三十六から「四」退いたものであるが、この四もまた二老の差（「**相距之数**」）の十二の三分の一（「**三之一**」）である。少陽と老陰の関係も同様である。○西山蔡氏：四十九本の著から掛一を除けば四十八となり、これを四で約せば（割れば）十二となり、十二で約せば四となる。四と十二、十二と四、両者は互いに変転して四十八となる。四十八とは、著が変化するための根拠となるものであり、その数は四と十二とになって自然に経緯をなす。

	掛扐の数	過揲の数
老陽	十二	三十六
少陰	十六	三十二
少陽	二十	二十八
老陰	二十四	二十四

〔以下、四と十二とによって老陽・老陰・少陽・少陰を考察する〕老陽の掛扐の数（奇数）は十二であるが、これを十二で約せば一、これは**━**の象を表す。十二を四で約せば三、これは**☰**の象を表している。老陰の掛扐の数は二十四であるが、これを十二で約せば二、これは**╍**の象を表す。二十四を四で約せば六、これは**☷**の象を表している。老陽の過揲の数（策数）は三十六で、これを十二で約せば三、これは「三（参）天」の象を表している。三十六を四で約せば九、これは「用九」を表している。老陰の過揲の数（策数）は二十四、これを十二で約せば二、これは「両地」の象を表している。二十四を四で約せば六、これは「用六」を表している。掛扐の数（奇数）において、少陽二十を十二で約せば八余る。陽の未完成なるものである。少陰十六を十二で約せば四余る。陰の未完成なるものである。過揲の数（策数）において、少陽二十八を四で約せば七となる。「不用之七」である。少陰三十二を四で約せば八となる。「不用之八」である。以下、四と十二を用いて、老陽・老陰・少陽・少陰の間（掛扐の数（奇数）・過揲の数（策数））に如何なる関係（進退）があるのかを説明する。○玉斎胡氏：老陽が変化して少陰となる。つまり、掛扐の数において、老陽十二から「四」進んで少陰十六となる。過揲の数はその逆である。また、老陰が変化して少陽となる。つまり、掛扐の数において、老陰二十四から「四」退いて少陽二十となる。つまり、二老の差（「**相距之数**」）十二の三分の一（「**三之一**」）である「四」の進

退により、二少（少陽・少陰）が成立する。

（イ）『啓蒙伝疑』（明蓍策第三、九丁表～九丁裏）

「〔〇伝疑曰〕註蔡氏説三天之象……」（三十八丁裏二行目）から「……則此消息二字之誤換可知」（三十八丁裏六行目）まで。

〔概要〕李滉：右（ア）西山蔡氏の説にいう「少陰奇数…由老陽而消」の「消」は「息」、「少陰奇数…由老陽而消」の「消」は「息」とすべきである。

（十六）「老陽居一」条　三十八丁裏～四十丁裏

〔易学啓蒙〕「老陽居一而含九、故其掛扐十二為最少、而過揲三十六為最多。少陰居二而含八、故其掛扐十六為次少、而過揲三十二為次多。……蓋陽奇而陰偶、是以掛扐之数、老陽極少、老陰極多、而二少者一進一退而交于中焉。此其以少為貴者也。陽実而陰虚、是以過揲之数、老陽極多、老陰極少、而二少者亦一進一退而交于中焉。此其以多為貴者也」。

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）→『周易全書』→『啓蒙伝疑』

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三、四十四丁表～四十四丁裏）

「朱子曰、少陰掛扐之数十六……」（三十八丁裏七行目）から「……上文二老進退、各至於三之一以成二少之義」（三十九丁裏二行目）まで。

〔概要〕朱子：掛扐の数において、少陰十六は老陽十二から「四」進み、少陽は老陰から「四」退いている。過揲の数は、進退が逆になっている。このように、掛扐・過揲の数において、二少（少陰・少陽）は、二老（老陽・老陰）から一進一退して二老の間にある（「二少者一進一退而交于中」）。玉斎胡氏：「老陽居一而含九」「少陽居三而含七」、つまり、陽は位・数ともに「奇」である。奇とは一にして「実」である。「老陰居四而含六」「少陰居二而含八」、つまり、陰は位・数ともに「偶」である。偶とは二にして「虚」である。陽の「奇」を主として言うなら、掛扐の数は少ない方を貴ぶので（「以少為貴」）、老陽が極少、老陰が極多となり、少陰が次少、少陽が次多（『易学啓蒙補要解』の「要解」により、「少陰」を「少陽」に改めた）となってその間にある。陽の「実」を主として言うなら、過揲の数は多い方を貴ぶので（「以多為貴」）、老陽が極多、老陰が極少となり、少陰が次多（『易学啓蒙補要解』の「要解」により、「少陽」を「少陰」に改めた）、少陽が次少（『易学啓蒙補要解』の「要解」により、「少陰」を「少陽」に改めた）となってその間にある。ここに「陽を尊ぶの義」を見ることができる。

（イ）『周易全書』（易学啓蒙巻之四「明蓍策第三」、三十九丁裏）

「〇周易全書、朱子曰少陰云々于中……」（三十九丁裏二行目）から「…本陽奇読作単」（四十丁表一行目）まで。

〔概要〕韓苑洛：老陽・少陰・少陽・老陰の掛扐の数は、十二・十六・二十・二十四で「四」ずつ進んでおり、過揲の数は、三十六・三十二・二十八・二十四で「四」ずつ退いている。これを朱子の前説（ア）と合わせて言うなら、老陽・少陰・少陽・老陰の進退の間にはただ「四」があるのみである。「四」は進退の主である。それでは一体何者が、こうした進退をなさしめるのだろうか。それは「太極」である。道を知る者でなければ、これを知るのは難しい。

（ウ）『啓蒙伝疑』（明蓍策第三、九丁裏～十丁表）

「〔〇伝疑〕註胡氏説老陽極少……」（四十丁表一行目）から「……就而言者不同故也」（四十丁裏三行目）まで。

〔概要〕李滉：右（ア）の玉斎胡氏の説にいう「老陽極少、少陰次少、而老陰掛扐極多、少陰掛扐次多者……」の前者の「少陰」は「少陽」の誤りである。これを「少陽」に改めるならば、玉斎胡氏と朱子とでは解説が異なることになる（筆者註：『易学啓蒙補要解』では後者の「少陰」を「少陽」に改めるべきとする。以下も同様。このように改めれば朱子の説と同じになる）。朱子は老陽・少陰・少陽・老陰の中で比較して極少・次少・極多・次多と順位づけした（以四象位次列叙言之）のに対し、玉斎胡氏は、「陽の奇」を主として分類している。つまり、掛扐の数において、少陽二十を老陽十二に次いで「次少」とし、少陰十六を老陰二十四に次いで「次多」としているが、これもまた道理にかなっている。玉斎胡氏は朱子に異を立てようとしたのではなく、説明の視点が異なっているだけである。

（十七）「凡此不唯陰之与陽」条　四十丁裏～四十二丁表

〔易学啓蒙〕「**凡此不唯陰之与陽既為二物而迭為消長、而其一物之中、此二端者、又各自為一物而迭為消長。其相与低昂如権衡、其相与判合如符契、固有非人之私智所能取舎而有無者**」。

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）→『啓蒙伝疑』

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三、四十五丁表～四十六丁表）

「玉斎胡氏曰、陰陽二物……」（四十丁裏四行目）から「……豈容人力於其間哉」（四十丁表九行目）まで。

〔概要〕玉斎胡氏：陰陽の「二物」とは二老（老陽・老陰）のことである。掛扐の数において、老陽十二は四を加える（「長」）ことにより少陰十六となり、老陰二十四は四を減じる（「消」）ことにより少陽二十となる。過揲の数においてはその逆となる。このように互いに消長をなす（「**迭為消長**」）ことによって二少（少陰・少陽）となる。「**二端**」とは、掛扐・過揲のことである。掛扐の数が増加（「長」）すれば過揲の数が減少（「消」）し、過揲の数が増加（「長」）すれば掛扐の数が減少（「消」）する。互いに上下増減する様はまる

で天秤竿のようである（「**相与低昂如権衡**」）。また、陰陽二物は互いに消長をなすが、これを二分して一物としても、その一物の中にまたそれぞれ掛扐と過揲という「**二端**」があり、互いに消長をなしている。それは符契（割り符）が合わさったり判かれたりするようなものである（「**相与判合如符契**」）。「**相与**」の義により「**迭為**」の旨を究めれば、そこにみられる「自然の妙」は、人力の介在し得ないものであることがわかる。

（イ）『啓蒙伝疑』（明蓍策第三、十丁表～十丁裏）

「〔〇伝疑曰〕玉斎以陰陽二物為合、其一物為判……」（四十一丁表九行目）から「……恐非朱子本意也」（四十二丁表三行目）まで。

〔概要〕李滉：玉斎胡氏は、陰陽二物を「**合**」とし、それぞれ一物を「**判**」とするが（右（ア））、それは「符契判合」の意味にそぐわないし、朱子の本意ではなかろう。私（李滉）が思うに、あるいは老陽・老陰となったり、あるいは少陽・少陰となったりすることが「**判**」である。掛扐の数（奇）と過揲の数（策）が互いに進退（増減）し合うことが「**合**」である。例えば、老陽の掛扐十二が「十二」進んで老陰の掛扐二十四となれば、老陽の過揲三十六は「十二」退いて老陽の過揲二十四となる。老陰の掛扐二十四が「十二」退いて老陽の掛扐十二となれば、老陰の過揲二十四は「十二」進んで老陽の過揲三十六となる。少陽と少陰の関係も、「四」の進退により同様に考えられる。このように掛扐の数と過揲の数との「**二端**」は、互いに進退し合い、「多少を以て相対し、消息を為す」のである。これが「**合**」である。

（十八）「**而況掛扐之数**」条　四十二丁表～四十四丁裏

〔易学啓蒙〕「**而況掛扐之数乃七八九六之原、而過揲之数乃七八九六之委、其勢又有軽重之不同。而或者乃欲廃置掛扐、而独以過揲之数為断、則是舎本而取末、去約以就煩、而不知其不可也。豈不誤哉**」。

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）→『啓蒙伝疑』

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三、四十五丁表～四十六丁表）

「雲荘劉氏曰、掛扐之数所以不可廃置者……」（四十二丁表四行目）から「……此説所謂或者正指郭氏言也」（四十四丁表六行目）まで。

〔概要〕雲荘劉氏：掛扐の数を捨て置くこと（「**廃置掛扐**」）ができない理由は、そこに両儀・三才・四時・閏余の象があるからである。掛扐の数を捨て置いて過揲の数だけを用いようとするのは、根本の意味を知らないからである、玉斎胡氏：掛扐の数が先ずあって、その後に過揲の数がある。このような先後関係があるが故に、掛扐は七（少陽）八（少陰）九（老陽）六（老陰）の本であり、過揲は七（少陽）八（少陰）九（老陽）六（老陰）の末であるという（「**掛扐之数、乃七八九六之原、而過揲之数乃七八九六之委**」）。掛扐の数〔から導き出された〕七・八・九・六にそれぞれ四を掛けれ

ば、二十八・三十二・三十六・二十四となり、少陽・少陰・老陽・老陰の過揲の数となる。それを四で割ればまた掛扐の数七八九六となる。この「自然の妙」は、牡牝が互い包含し合うようであり、符契が互いに合致するかのようである。両者は互いに作用し合っており、互いになくてはならない存在である。それなのに、郭雍のように（朱子のいう「**或者**」とは郭雍のことをいう。『蓍卦辨疑』の著者）、掛扐は揲法に何ら関与するところはないとして、過揲の数のみを「正策」として重宝するのは甚だしい誤りである。

（イ）『啓蒙伝疑』（明蓍策第三、十一丁表）

「〔〇伝疑曰〕註胡氏説以四乗掛扐之数……」（四十四丁表六行目）から「……迭為消長若相制勝也」（四十四丁裏二行目）まで。

〔概要〕李滉：右（ア）の玉斎胡氏の説の補足。

（十九）「邵子曰五与四四」条　四十四丁表～四十六丁表

〔易学啓蒙〕「**邵子曰、『五与四四、去掛一之数、則四三十二也。九与八八、去掛一之数、則四六二十四也。五与八八、九与四八、去掛一之数、則四五二十也。九与四四、五与四八、去掛一之数、則四四十六也。故去其三四五六之数、以成九八七六之策』。此之謂也**」。

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三、四十九丁裏～五十一丁表）

「朱子曰、邵子此条是説陰陽老少……」（四十四丁裏三行目）から「……其尊陽之意、又可見於此矣」（四十六丁表二行目）まで。

〔概要〕朱子：邵子のこの条（『皇極経世書』観物外篇上）は、老陽・老陰・少陽・少陰の掛扐の数を説いたものである。『易学啓蒙』にこの邵子の説を引用したのは、掛扐の数が七八九六の本（もと）であるということ（「**掛扐之数、乃七八九六之原**」）を証明するためである。掛扐の数は、老陽三×四（＝十二）・少陰四×四（＝十六）・少陽五×四（＝二十）・老陰六×四（＝二十四）であるが、今、この三四五六の数を用いないで、一奇「径一囲三」（つまり、一奇には三が含まれると考える）、二偶に「囲四用半」（つまり、二偶には二が含まれると考える）の義を用いたのは、七八九六の数を成すためである。玉斎胡氏：掛扐の数から「初掛の一」を除くのは、三変における奇偶多寡を調べるためである。奇の象である円は「全」を用いて「径一囲三」、偶の象である方は「半」を用いて「径一囲四」である。つまり、一奇には「円を象って其の全を用う（**象円而用其全**）」から三、二偶には「方を象（かたど）って其の半を用う（**象方而用其半**）」から二が含まれると考えれば（前稿（八）（九）（十）（十一）を参照）、老陽の一・一・一（三奇）は三・三・三となって計九となる。つまり、「三（一＋一＋一）を去って以て九を成す」である。少陰の二・一・一、一・一・二（両奇一偶）はそれぞれ二・三・三、三・三・二となって計八となる。つまり、「四（二＋一＋

一）を去って以て八を成す」である。少陽の一・二・二、二・一・二（両偶一奇）はそれぞれ三・二・二、二・三・二となって計七となる。つまり、「五（一＋二＋二）を去って以て七を成す」である。老陰の二・二・二（三偶）は二・二・二となって計六となる。つまり、「六（二＋二＋二）を去って以て六を成す」である。以上が「**去其三四五六之数、以成九八七六之策**」の意味である。

（二十）「**一爻已成**」条　四十六丁表～四十七丁表

〔易学啓蒙〕「**一爻已成、再合四十九策、復分掛揲帰以成一変、毎三変而成一爻、並如前法**」。

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）→『啓蒙伝疑』

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三、五十一丁裏～五十二丁裏）

「〔朱子曰〕老少於経固無明文……」（四十六丁表三行目）から「……則其過揲者四之而為二十四矣」（四十六丁裏十行目）まで。

〔概要〕朱子：老少については経典（『易経』）に明らかな解説はない。しかし、蓍を揲（かぞ）える方法は、各変において奇偶に分かれ、三変した後に爻の陰陽が決まる。さらにその陰陽も老少に分かれ、爻の変・不変が決まる。これが経典にいう「用九」「用六」である。

○九六の説について。五行の成数（六・七・八・九・十）において十は用いず、六・七・八・九のみを用いる。陽は九に極まれば、転じて八に退き陰となる。陰は六に極まれば、転じて七に進み陽となる。このように陰陽は六・七・八・九の間を一進一退し、循環して窮まることがない（循環無端）。邵康節は、「三を以て真数と為し」、「三両を以て之に乗じて九六の数を得」（解釈は左（イ）を参照）。

（イ）『啓蒙伝疑』（明蓍策第三、十一丁表～十一丁裏）

「〔○伝疑曰〕註朱子引康節以三為真数……」（四十六丁裏十行目）から「……而得九以両乗之而得六也」（四十七丁表三行目）まで。

〔概要〕李滉：右（ア）の邵康節のいう「三を以て真数と為す」とは、『皇極経世書』観物外篇下の「易有真数、三而已」のことであろう。「三両を以て之に乗じて、九六の数を得」とは、三と二を真数である三に掛けることで九と六が得られるということである。

（二十一）「**乾之策**」章　四十七丁表～四十七丁裏

〔易学啓蒙〕「『**乾之策二百一十有六、坤之策百四十有四、凡三百有六十、当期之日。**』**乾之策二百一十有六者、積六爻之策各三十六而得之也。坤之策百四十有四者、積六爻之策各二十有四而得之也。……此独以老陰陽之策為言者、以易用九六、不用七八也。然二少之合亦三百有六十**」

《『易』繫辞上伝の「**乾之策二百一十有六、坤之策百四十有四、凡三百有六十、当期之日**」についての朱子の解説》

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、二丁表～三丁表）

「玉斎胡氏曰、策指過揲之策……」（四十七丁表四行目）から「……亦正足以当期之数也」（四十七丁裏七行目）まで。

〔概要〕玉斎胡氏：「策」とは過揲の策（数）を指す。乾の各爻が老陽であるなら、過揲の策は二百十六（三六×六）、坤の各爻が老陰であるなら、過揲の数は百四十四（二四×六）、その合計は三百六十で一年の日数に相当する（「凡三百有六十、当期之日」）。乾の各爻が少陽であるなら、過揲の策は百六十八（二八×六）、坤の各爻が少陰であるなら、過揲の策は百九十二（三二×六）となり、その合計もまた三百六十で一年の日数に相当する（「二少之合亦三百六十」）。老少ともに同じ結果になるのに、経文では老（老陽・老陰）のみに言及している。易では九六によって各爻を名づけるように（例えば九三、六二）、老陽（九）老陰（六）のみを言って、少陽（七）少陰（八）については言及しないのである（「以易用九六、不用七八也」）。朱子は程可久に答えて以下のようにいう。「乾坤の各爻はすべてが老陽老陰というわけではなく、実際には老少が錯雑しているわけであるが、大伝（『易』繫辞伝）では、六爻すべてが老陽老陰であるとして計算して、「乾之策二百一十有六」（老陽の過揲の数（策）三六×六爻）「坤之策百四十有四」（老陰の過揲の数（策）二四×六爻）「凡三百有六十」（二一六＋一四四）と言うだけである。一方で、六子（兌☱離☲震☳巽☴坎☵艮☶）の諸卦も同様に老少が混雑しているわけであるが、それぞれの策数（過揲の数）を〔その旁通卦（陰陽逆転の卦）の策数と合するならば〕、老少のいずれで計算しても乾坤と同様、三百六十となる。もし、乾坤の場合は六爻すべてが老陽老陰であるとし、六子の場合は六爻がすべて少陽少陰であるとして計算するならば、どうもしっくりこない（以上、朱子の説）。「凡三百有六十、当期之日」の「期」とは「周」、つまり「周一歳」のことである。また、「以気言之、則有三百六十六日」「以朔言之、則有三百五十五日」という。三百六十は、「気盈」（三百六十六日）と比較すれば六日少ないのでこれを「盈」とは言えないし、「朔虚」（三百五十五日）と比較すれば六日多いのでこれを「虚」とは言えない。「気盈」「朔虚」の間においてその数の中間を指して三百六十という（「今挙気盈朔虚之中数而言、故曰三百有六十也」）。

末に「〇閏法詳于補要解及伝疑」とある。

（二十二）「二篇之策」章　四十八丁表

〔易学啓蒙〕「『二篇之策、万有一千五百二十、当万物之数也。』二篇者、上下経六十四卦也。其陽爻百九十二、毎爻各三十六策、積之得六千九百一十二。陰爻百九十二、毎爻二十四策、積之得四千六百八、又合二者為万有一千五百二十也。若為少陽、則毎爻二十八策、凡五千三百七十六。少陰、則毎爻三十二策、凡六千一百四十四、合之亦為万一

五百二十也」

《『易』繫辞上伝の「二篇之策、万有一千五百二十、当万物之数也」についての朱子の解説》

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、十二丁表）

「西山蔡氏曰、此即過揲之蓍、大衍之終也。……」（四十八丁表一行目）から「……真所謂与天地相似者也」（四十八丁表六行目）まで。

〔概要〕西山蔡氏：この一一五二〇という数は、過揲の蓍（数）を大いに敷衍した（大衍）結果の数である。「策」とは蓍である。乾の一爻は三十六策、六爻は二百十六策、坤の一爻は二十四策、六爻は百四十四策であり〔両者を合わせると三百六十となる〕。これは「陰陽自然の数」であり、聖人は「大衍の法」を立ててこれに依拠せしめるのである。これが『易』説卦伝にいう「参天両地而倚数」である。天地の運行は大小にかかわりなく全て三百六十に極まる。乾坤の策（過揲の数）を大いに敷衍すれば（大衍）、一年の日数三百六十に相当する（「当期之日」）。易は実に天地と似ている。

（二十三）「是故四営」章　四十六丁表～五十丁表

〔易学啓蒙〕「『是故四営而成易、十有八変而成卦、八卦而小成、引而伸之、触類而長之、天下之能事畢矣。』四営者、四次経営也。分二者、第一営也。挂一者、第二営也。揲四者、第三営也。帰奇者、第四営也。……然後視其爻之変与不変、而触類以長焉、則天下之事、其吉凶悔吝皆不越乎此矣」

《この条は、『易』繫辞上伝の「是故四営而成易、十有八変而成卦、八卦而小成、引而伸之、触類而長之、天下之能事畢矣」についての朱子の解説》

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、十四丁表～十六丁裏）

「朱子曰、四営而成易。易字只是箇変字。……」（四十八丁表七行目）から「……皆可以決諸此而無復疑矣」（五十丁表八行目）まで。

〔概要〕朱子：『易』繫辞上伝にいう「是故四営而成易」の「易」とは「変」にほかならない。四営（四回の筮操作）して一変が成るという意味である。これを「易の一変」と言うのはよくない。この段階ではまだ卦も爻も定まっていないのだから、ただ「易」というほかない。玉斎胡氏：掛扐の数は、第一変が五か九、第二変が四か八、第三変が四か八である。そこで、第一変で、五を得るものを陽儀、九を得るものを陰儀としてみれば、両儀の象を得る（「一変而得両儀之象」）。第一変・第二変で、五四を得るものを太陽、五八を得るもの少陰、九四を得るものを少陽、九八を得るものを太陰としてみれば、四象の象を得る（「再変而得四象之象」）。第一変・第二変・第三変で、五四四を得るものを乾、五四八を得るものを兌、

五八四を得るものを離、五八八を得るものを震、九四四を得るものを巽、九四八を得るものを坎、九八四を得るものを艮、九八八を得るものを坤としてみれば、八卦の象を得る（「**三変而得八卦之象**」）。このように第一変→第二変→第三変と重ねていくことは、両儀→四象→八卦という流れを彷彿とさせるが、画（爻）はまだ生じていないので「**象**」と言葉を用いているのである。

〔以下、六十四卦円図（伏羲六十四卦方位）を用いて説明〕

「**一爻而得両儀之画**」について、☰を得るものは陽儀で、乾から復までの三十二卦、☷を得るものは陰儀で、姤から坤までの三十二卦である。「**二爻而得四象之画**」について、☱を得るものは太陽で、乾から臨までの十六卦、☳を得るものは少陽で、同人から復までの十六卦、☴を得るものは少陰で、姤から師までの十六卦、☵を得るものは太陰で、遯から坤までの十六卦である。「**三爻而得八卦之画**」について、☰を得るものは乾で、乾から泰までの八卦。☱を得るものは兌で、履から臨までの八卦。以下同様である。「**四爻而得其十六者之一**」についても同様に爻を重ねてそれぞれ四卦、「**五爻而得其三十二者之一**」についてはそれぞれ二卦（六四÷三二）、「**六爻見而得六十四卦之一**」に至って六十四卦の中の一卦が得られる。朱子は、しばしば「揲蓍求卦之法」について述べている。一爻が成って三十二卦、二爻が成って十六卦、三爻が成って八卦、四爻が成って四卦、五爻が成って二卦、六爻が成って一卦が定まるというのがそうである。「**内卦之為貞**」「**外卦之為悔**」について朱子はいう。「貞」「悔」とは『書』洪範編にある。「貞」は正しく、「悔」は過（あやま）るという意味であろう。「悔」とは何かを過（あやま）ってはじめて後悔するのである。下の三爻は正の卦で、上の三爻は過（あやま）ちが多いことを意味している。物が生ずる際、初めはうまく進むものである。物は全てそうである。邵康節は事物を観察して四つ分け、旺盛な状態にあることを恐れた。花に譬えれば、蕾の時は旺盛へと向かっており、半分開けばさらに旺盛となり、全開すれば甚だ旺盛となり、その後は衰える一方である。人も同様で、勢い盛んなる者は必ず衰退する。強く壮んなる者は必ず死に至る。邵康節は、一見してたちどころにこれをよく理解した。「**触類而長之**」について朱子はいう。占って一卦を得たら、その表面的な意味からどんどん類推していく。例えば乾は、円となり君となり父となるといった類から類推していく。このようにして、天下のあらゆる事において、吉か凶か、悔いて吉に赴くのか、吝から凶に向かうのか、判断を下して疑いがなくなる。

（二十四）「顕道」章　五十丁表～五十一丁裏

〔易学啓蒙〕「『**顕道、神徳行、是故可与酬酢、可与祐神矣。**』**道因辞顕、行以数神。酬酢者、言幽明之相応、如賓主之相交也。祐神者、言**

有以祐助神化之功也。○巻内蔡氏説『為奇者三、為偶者二』、蓋凡初揲、左手余一余二余三皆為奇、余四為偶。至再揲三揲、則余三者亦為偶、故曰奇三而偶二也」

《この条は、『易』繫辞上伝の「顕道、神徳行、是故可与酬酢、可与祐神矣」についての朱子の解説》

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、十八丁表～十九丁裏）

「黄氏瑞節曰、大衍之説、朱蔡可謂備矣。……」（五十丁表九行目）から「……自然有許多通透信矣」（五十一丁裏一行目）まで。

〔概要〕黄氏瑞節：大衍については、朱子の説も蔡元定の説もともに完備したものと言ってよい。武陵の丁氏（龍陽の人）はいう。朱子は、「五乗十」（五十）の説については諸家に近いとし、「四十有九」の説に至っては、虚一に帰することをいうにすぎず、五十と四十九とを関連付けてその全体を説くには至っていない。そこで五十七家の説を集めて比較敷衍し、『原衍翼衍』三巻を著したのである。ここで丁氏はいう。天地の数（一二三四五六七八九十）を①②のように並べ、その両者を加えれば③段のようになる。そこから十を分離すると、④段目の九位と、⑤段目の五位とに分かれる。九位は全て奇数で、五位はすべて偶数である。五位の偶数の和は十＋十＋十＋十＋十＝五十となり、大衍の体数である。九位の奇数の和は九＋七＋五＋三＋一＋三＋五＋七＋九＝四十九となり、大衍の用数である。④段目（九位）をみると、一が中央に位置しており、その左右には四数（九七五三）が並んでいる。これはまさに筮操作における掛一・分二・揲四を象徴している。以上の丁氏の説は、朱子や蔡元定の説にないものであり、朱子や蔡元定の説をさらに完備させたようなものである。朱子は、聖人が象数を説く方法は幾通りもあり、自然に多数の説へと通じていくと言ったが、まさにその通りである。

【以下、『易学啓蒙』考変占第四】

（二十五）「凡卦六爻皆不変」条　五十二丁表

〔易学啓蒙〕「凡卦六爻皆不変、則占本卦彖辞、而以内卦為貞、外卦為悔。彖辞為卦下之辞。孔成子筮立衛公子元、遇屯、曰、『利建侯』。泰伯伐晋、筮之、遇蠱、曰、『貞、風也。其悔、山也』」

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、二十四丁裏）

「朱子云、貞是事之始、悔是事之終、貞是事之主、悔是事之客、貞是事在我底、悔是応人底」（五

①	九	八	七	六	五	四	三	二	一
②	十	九	八	七	六	五	四	三	二
③（①＋②）	十九	十七	十五	十三	十一	九	七	五	三
④（九位）	九	七	五	三	一	九	七	五	三
⑤（五位）	十	十	十	十					

十二丁表二行目～四行目）

（二十六）「一爻変」条　五十二丁表

〔易学啓蒙〕「一変爻、則以本卦変爻辞占。沙隨程氏曰、『畢万遇屯之比、初九変也。蔡墨遇乾之同人、九二変也。晋文公遇大有之睽、九三変也。陳敬仲遇観之否、六四変也。南蒯遇坤之比、六五変也。晋献公遇帰妹之睽、上六変也』」

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、二十五丁裏）

「玉斎胡氏曰、一爻変者凡六卦有図在後。……」（五十二丁表五行目）から「……就本卦変爻占、其例観後注可見」（五十二丁表八行目）まで。

〔概要〕玉斎胡氏：一爻変は各卦にそれぞれ六卦ある。巻末の図表をみれば、第一図において乾を本卦とし、一爻が変化するのは、姤から夬までの六卦である（本卦である乾は第一図の右上にある。図は右から左、上から下へとみる。以下同じ）。坤を本卦とし、一爻が変化するのは、復から剥までの六卦である（本卦である坤は第一図の左下にある。図は左から右、下から上へとみる。以下同じ）。第二図以降も同様である。沙隨程氏が取り挙げる六つの占例は全て一爻が変化するもので、本卦の変爻によって占っている。その例は『易学啓蒙』の後注に見られる。

（二十七）「二爻変」　五十二丁表～五十二丁裏

〔易学啓蒙〕「二変爻、則以本卦二変爻辞占、仍以上爻為主。経伝無文、今以例推之当如此」

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、二十六丁裏～二十七丁表）

「玉斎胡氏曰、二爻変者、凡十五卦、……」（五十二丁表九行目）から「……占事都有一箇先後首尾」（五十二丁裏六行目）まで。

〔概要〕玉斎胡氏：二爻変は各卦にそれぞれ十五卦ある。巻末の図表をみれば、第一図において乾を本卦とし、二爻が変化するのは、遯から大壮までの十五卦である。坤を本卦とし、二爻が変化するのは、臨から観までの十五卦である。第二図以降も同様である。朱子はいう。変爻は、変化が極まる所において観る必要がある。だから上爻を主とするのだ（「以上爻為主」）。不変の爻は安定しており、下から上へ先後（順序）にしたがってみる。だから下爻を主とする、と。また朱子はいう。二爻が変化する場合、下から上へと進んで極まる（だから極所である上を主とする）。二爻が変化しない場合（つまり四爻変）、下が「不変の本」であるから下を主とする、と。また朱子はいう。卦は下から生ずる。占事にはすべて先後首尾があるのだ、と。

（二十八）「三爻変」条　五十二丁裏～五十三丁裏

〔易学啓蒙〕「三爻変、則占本卦及之卦之彖辞、而以本卦為貞、之卦為悔、前十卦主貞、後十卦主悔。凡三爻変者通二十卦、有図在後。○沙隨程氏曰、『晋公子重耳筮得国、遇貞屯、悔豫皆八、蓋初与四、五凡三爻変也。初与五用九変、四用六変。其不変者二三上、在両卦皆為八、故云皆八。而司空季子占之曰、『皆利建侯』』」

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、二十七丁裏～二十八九丁表）

「玉斎胡氏曰、三爻変者凡二十卦。……」（五十二丁表七行目）から「……到四画五画則更多矣」（五十三丁裏一行目）まで。

〔概要〕玉斎胡氏：三爻変は各卦にそれぞれ二十卦ある。巻末の図表をみれば、第一図において乾を本卦とし、三爻が変化するのは、否から泰までの二十卦である。坤を本卦とし、三爻が変化するのは、泰から否までの二十卦である。第二図以降も同様である。本卦と之卦の彖辞（卦辞）によって占うのは、変化する爻と不変の爻の数がともに六爻を二分した三爻であるからだ。「以本卦為貞、之卦為悔」「前十卦主貞、後十卦主悔」について。第一図の乾の三爻変において、否から恒までが「前十卦」で、益から泰までが「後十卦」である。第一図の坤の三爻変において、泰から益までが「前十卦」で、恒から否までが「後十卦」である。三変爻の場合、本卦と之卦の両方の彖辞によって占うのであるが、之卦（変卦）が「前十卦」の内にあれば「貞」、つまり「本卦」の彖辞を主とし、之卦（変卦）が「後十卦」の内にあれば「悔」、つまり「之卦」の彖辞を主とする。朱子はいう。三爻が変化すれば、どの変爻を主として見ればよいかわからない。よって本卦と之卦の両方の彖辞によって占うのである、と。また朱子はいう。三変爻において第三十二卦（恒）以降は之卦の彖辞によって占うという方法もあるが、これは間違いである。このようにしたら、本卦から離れてしまう割合が増えてしまう。

（二十九）「四爻変」　五十三丁裏

〔易学啓蒙〕「四爻変、則以之卦二不変爻占、仍以下爻為主。経伝亦無文、今以例推之当如此」

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、二十八丁裏）

「玉斎胡氏曰、四爻変凡十五卦、……」（五十三丁裏二行目）から「……四爻変自大壮至遯是也。後放此」（五十三丁裏四行目）まで。

〔概要〕玉斎胡氏：四爻変は各卦にそれぞれ十五卦ある。巻末の図表をみれば、第一図において乾を本卦とし、四爻が変化するのは、観から臨までの十五卦である。坤を本卦とし、四爻が変化するのは、大壮から遯までの十五卦である。第二図以降も同様である。

（三十）「五爻変」　五十三丁裏

〔易学啓蒙〕「五爻変、則以之卦不変爻占。穆姜往東宮、筮遇艮之八。史曰、『是謂艮之随』。蓋五爻皆変、唯二得八故不変也。法宜以『係小子、失丈夫』。為占、而史妄引隨之彖辞以対則非也」

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、二十九丁表）

「朱子曰、艮之隨、惟六二一爻不変、……」（五十三丁裏五行目）から「……五爻変自夬至姤是也。後放此」（五十三丁裏十行目）まで。

〔概要〕朱子：「艮之隨」（艮☶の、隨☳に之く）は、六二のみ不変で、他の五つの爻は全て変化する。変化する五つの爻は九（老陽）か六（老陰）で、変化しない六二は八（少陰）である。筮法は少ない方を主とする。変化する爻は五つ、変化しない爻は一つ。だから少ない方の八（少陰）によって占いを行ない、「艮之八」（艮の八に之く）というのである。玉斎胡氏：五爻変は各卦にそれぞれ六卦ある。巻末の図表をみれば、第一図において乾を本卦とし、五爻が変化するのは、剥から復までの六卦である。坤を本卦とし、五爻が変化するのは、夬から姤までの六卦である。第二図以降も同様である。

（三十一）「六爻変」条　五十四丁表

〔易学啓蒙〕「六爻変、則乾坤占二用、余卦占之卦彖辞。蔡墨曰『乾之坤、曰、見羣龍无首、吉』、是也。然『羣龍无首』、即坤之牝馬先迷也。坤之『利永貞』、即乾之「不言所利」也」

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、三十丁表～三十一丁裏）

「玉斎胡氏曰、六爻変只一卦、……」（五十四丁表一行目）から「……不言所利者貞也」（五十四丁表九行目）まで。

〔概要〕玉斎胡氏：六爻変は各卦にそれぞれ一卦ある。巻末の図表をみれば、第一図において乾を本卦とし、六爻が変化するのは坤の一卦のみである。坤を本卦とし、六爻が変化するのは、乾の一卦のみである。第二図以降も同様である。乾坤の場合は「用九」「用六」の辞によって占う（「乾坤占二用」）。その他の卦は、「用九」「用六」の辞はないので、之卦の彖辞（卦辞）によって占う（余卦占之卦彖辞）。朱子はいう。乾の六爻が全て変化すれば陰（坤）となる。だから、「用九」に「群龍无首（群龍に首なし）」というのである。これは坤卦の「利牝馬之貞（牝馬の貞に利あり）」にほかならない。その意味するところは、群龍でありながら頭がない、剛でありながら柔を忘れなければ吉である、ということである（「乾之坤、曰、見羣龍无首、吉」）。「牝馬」は柔順でありながら力強く走るので、坤卦ではこれを「利」とし「貞」とする。「先迷（先んずれば迷う）」とは、陽が先に行き陰が後れるのが自然な道理である

から、陰が陽の先に行ってしまえば迷うことになる（「『羣龍无首』、即坤之牝馬先迷也」）。また朱子はいう。坤の六爻が全て変化すれば陽（乾）となる。だから、「用六」に「利永貞（永貞に利あり）」というのである。これは乾卦の「元亨利貞」にほかならない（「坤之『利永貞』、即乾之「不言所利」也」）。

（三十二）「於是一卦」条　五十四丁表～五十五丁表

〔易学啓蒙〕「於是一卦可変六十四卦、而四千九十六卦在其中矣。所謂『引而伸之、触類而長之、天下之能事畢矣』、豈不信哉。……変在第三十二卦以前者、占本卦爻之辞。変在第三十二卦以後者、占変卦爻之辞。凡言初終上下者、拠図而言。言第幾卦前後者、従本卦起」

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之三末、三十二丁表～三十三丁表）

「玉斎胡氏曰、三十二図初終上下各主首末両卦為本卦、……」（五十四丁表十行目）から「……則便過其中、故皆主悔卦以為占也」（五十五丁表五行目）まで。

〔概要〕玉斎胡氏：巻末の三十二図では各図の首末の両卦を本卦とする（例えば、第一図であれば首の乾と末の坤とが本卦）。本卦の爻の中の老陽老陰が変化することで、一卦が六十四卦に変化し得る（各図においてそれぞれ六十四の之卦が確認できる）（「一卦可変六十四卦」）。つまり、計「四千九十六卦」（六四×六四）が六十四卦の変化の中に存在する（「四千九十六卦在其中矣」）。第一図の首（「初卦」）である乾卦は、姤の初六から坤の上六まで変化するが、図では初めから終わりへ、上から下へとみていく（「得初卦者、自初而終、自上而下」）。第一図の末（「末卦」）である坤卦は、復の初九から乾の上九まで変化するが、図では終わりから初めへ、下から上へとみていく（「得初卦者、自初而終、自上而下」）。第二図以降も同様である。また第一図において、乾の場合では姤から恒まで、坤の場合は復から益までが「三十二卦の前（前半の三十二卦）」で、すべて本卦の爻辞でもって占う（「変在第三十二卦以前者、占本卦爻之辞」）。ここには、「一爻変」「二爻変」、そして「三爻変」の前十卦が含まれる。さらに、乾の場合では益から坤まで、坤の場合は恒から乾までが「三十二卦の後（後半の三十二卦）」で、すべて変卦（之卦）の爻辞でもって占う（「変在第三十二卦以後者、占変卦爻之辞」）。ここには、「三爻変」の後十卦、「四爻変」「五爻変」「六爻変」が含まれる。以上のように各図において三十二卦で前半と後半とに分ける。前半の三十二卦では「貞」を主とし、後半の三十二卦では「悔」を主とする。これを説明するのに「中」（中庸ヵ）を用いれば、前半の三十二卦では「中」に適うので全て「貞」を主とし、後半の三十二卦では「中」を過ぎてしまうので「悔」を主とするのだ。

（三十三）「以上三十二図」条　五十五丁表～五十五丁裏

〔易学啓蒙〕「以上三十二図、反復之則為六十四図、図以一卦為主、而各具六十四卦、凡四千九十六卦、与焦贛易林合。然其條理精密、則有先儒所未発者、覧者詳之」

〔引用順序〕『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）

（ア）『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之六、三十三丁表～三十三丁裏）

「玉斎胡氏曰、三十二図反復其変悉如乾坤二卦変図例。……」（五十五丁表六行目）から「……此乃卦画変図之妙也」（五十五丁裏七行目）まで。

〔概要〕玉斎胡氏：図における第一卦が本卦であり、順行して変化していけば、初めから終わりへ、上から下へと移行する。第一図では乾から坤まで変化する。これを反転させれば、末の一卦が本卦であり、逆行して変化していけば、終わりから初めへ、下から上へと移行する。第一図では坤から乾まで変化する。あるいは順行し、あるいは逆行することで、一つの図の中に二つの卦を本卦してその変化をみてとることができる。一つの図が二つ図を成しているのだ。だから三十二図が反復することで六十四図になるのである（「三十二図、反復之則為六十四図」）。三十二図における先後順序は、第一図における乾坤の変化を例にすれば、第二図以降の全ての図においても、同様にしてその変化をみてとることができる。第一図は乾が本卦となり、第二図は姤、第三図は同人とつづき、第三十二図の恒となる。計三十二卦。それぞれ三十二図の第一卦となり、順序に乱れはない。またこれを逆にみれば、第一図は坤が本卦となり、第二図は復、第三図は師とつづき、第三十二図の益となる。計三十二卦。それぞれ三十二図の末の一卦となり、順序に乱れはない。これは卦画変図の妙である。

（三十四）「邵子天地四象図」　五十六丁表

『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之六、三十八丁裏）

（三十五）「朱子天地四象図」　五十六丁裏

『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之六、三十九丁表）

（三十六）「掛扐過揲總図」　五十七丁表～五十七丁裏

『易学啓蒙補要解』（『性理大全』）（巻之六、三十九丁裏～四十丁表）

《結びにかえて》

『易学啓蒙』は、朱熹自ら初学者のために著した書であるとは言うものの（「易学啓蒙序」）、実際には非常に難解であり、とても注釈なしで理解できるようなものではない。その注釈書にしても、南宋以降の中国および朝鮮、さらには江戸期の日本においていくらか作成されてはいるものの、これらの書に関する情報も極端に不足しており、一体何からどのように手を付けてよいのかわからないというのが正直な所であろう。そのような中、安東省菴が編纂した註釈集『啓蒙難解』

は、南宋から明にかけての中国、さらには朝鮮で作成された代表的な註釈書から必要最低限の箇所のみを抜粋してコンパクトに整理しており、『易学啓蒙』の全体像および伝統的な解釈を知るには非常に有益である。とはいえ、それでもなお難解なところも少なくなく、本報告を作成するに当たっては、あくまでも筆者が現段階において理解し得た内容を整理したにすぎない。ただ一連の作業を通して、『易学啓蒙』の全体像はおぼろげながら掴むことができ、また、朱熹の「易」「理」について多少なりとも見えてきた点もある。そこで本報告を終えるにあたり、これらの点を少し紹介して結びとしたい。

これまでみてきたように朱熹の『易学啓蒙』は、「本図書第一」「原卦画第二」「明蓍策第三」「考変占第四」の四部構成となっており、それぞれ河図・洛書、先天図・後天図、占筮法、占断法について述べられているわけであるが、これを大きく二分すると前半が「画卦（卦を画く）」、後半が「揲蓍（蓍を揲（かぞ）える）」に関するものということになる。そして朱熹は「画卦」「揲蓍」の全てに「自然の法象」がみられるということを強調する。『啓蒙難解』に取り上げられている注釈にも、「人意を介せずして自然にそうなるのである」「そこにみられる自然の妙は、人力の介在し得ないものである」「自然の妙は、牡牝が互い包含し合うようであり、符契が互いに合致するかのようである」（以上「巻之下」）等とあり、「自然」「自然之妙」「自然の法象」といった表現が目立つ。

そこで改めて朱熹の「易学啓蒙序」を読み返してみると、

「画卦」においては、根から幹へ、幹から枝へと、その勢いにはそうせき立てるものがあり、自ら已むことはない。「揲蓍」においては、分合・進退・縦横・順逆、如何なる操作を施しても見事に一致するのである。これは、聖人が心思智慮（作為按排）を駆使して作り上げたものでは決してあるまい。ただ、気・数の自然なる様相が天の象（日月星辰等）や地の法（山川草木等）に形となって現れ、河図・洛書に象徴として現れたために、聖人は〔これらを参考にして〕自らの心を啓発し、〔心に備わる天地万物の理をよりどころとしつつ〕手を借りて易を作成したまでである。

其為卦也、自本而幹、自幹而支、其勢若有所迫、而自不能已。其為蓍也、分合進退従横逆順、亦無往而不相値焉。是豈聖人心思智慮之所得為也哉。特気数之自然、形於法象、見於図書者、有以啓於其心、而仮手焉耳。（「易学啓蒙序」）

とある。つまり「画卦」にしても「揲蓍」にしても、それは聖人が「心思智慮（作為按排）」を駆使してなされたものでは決してなく、「気・数の自然なる様相」が現れた天地の法象や河図洛書を手掛かりとし、自らの心に備わる理をよりどころとしつつ、それこそ自然な勢いに沿って作成されたものであるというのである。[1] さらに注目すべき

は、「卦を画く前にすでにこの理は存在していたのであるが、聡明神武の人（＝聖人）の手を借りてその秘密を明らかにしたまでである。卦を画く前にすでにこの図（卦）があり、卦を画いた後にはじめて八卦が生まれたというわけでもない。ここが易において最も重要な所（第一義）である。（未画之前已有此理、而特仮手於聰明神武之人以發其祕、非謂画前已有此図、画後方有八卦也。此是易中第一義也）（『晦庵先生朱文公文集』巻第三十八「答袁機仲」第六書簡）というように、易が作成される前から、その原型骨子ともいうべき「理」がすでに存在していたと述べている点である。[2] そしてこの「理」こそが、「気・数の自然なる様相」にほかならない。この画卦前にすでに存在していた「理」が、聖人の手を借りて明らかにされ、具体的な形（文）となって現れたものが易なのである。

さらには、このようにして作成された易を後から観察してみると、「逆順縦横、全てが義理を成しており、千般万種、その神妙さが窮まることはない（逆順縦横、都成義理、千般万種、其妙無窮）（同第二書簡）、「天下の現象変化が尽く備わっている（其可盡天下之変）」（同第三書簡）というように、天下のあらゆる現象変化がみてとれ、さらに、「逆順縦横」、いかなる視点からみても見事に合致する「義理」が確認されるのだという。こうした「義理」については、これまでの報告の中でみてきた通りである。[3] 本稿で言えば、（二十一）「乾之策」章において、乾坤の策数の合計が、老少いずれで計算しても三百六十となり、これが一年の日数と合致するといった類もその一例であろう。そして、「卦を画く時点においては、聖人といえども、卦の中に数多くの巧妙奇特なる理が隠されていることは知らなかった。（方其画時、雖是聖人、亦不自知裏面有許多巧妙奇特）」（同第三書簡）と述べるように、こうした「義理」を聖人があらかじめ想定し、智力の限りを尽くして易を作成したものでは決してなく、自らの心に備わる理を拠り所としつつ、少しも作為按排を加えることなく、無心に、自然な流れに即して作成したからこそ、当初は想像だにしなかった「巧妙奇特なる理」が備わることになったのだと説くのである。そしてこれを朱熹は、「易を作成する際の妙処（作易妙処）」だと述べている。以上のことから朱熹にとって「理（義理）」とは、「自然」であるかどうか、そこに「作為」があるかどうかという点が絶対的な条件であったことが窺えるのである。

今後は、この「自然」という点に特に着目しながら、『易学啓蒙』の「本図書第一」「原卦画第二」「明蓍策第三」「考変占第四」についてより詳細な解読・分析を進めていきたいと考えている。

注

1　こうした朱熹の考え方は、『易学啓蒙』に疑念を抱く袁機仲への書簡（『晦庵先生朱文公文集』巻第三十八「答袁機仲」）の中でも確認することができる。「これらは皆、自然に生じ、噴涌して流出し、智力を借りることなく、手勢を犯すこともない。（是皆自然而生、瀵湧而

出、不仮智力、不犯手勢）」（第六書簡）、「…六十四卦全てが天理の自然な流れに促されて生まれたことがわかる。聖人はこの所を明瞭に理解し、根本より〔自然に〕画き出したまでで、元からほんのわずかな智力も加えるはなかった。（…方見六十四卦全是天理自然挨排出来、聖人只是見得分明、便只依本画出、元不曽用一毫智力添助）（第二書簡）

2　『晦庵先生朱文公文集』巻第三十八「答袁機仲」第三書簡にも、卦を画く前に、「もともと太極・両儀・四象・八卦の骨子が存在した（元有箇太極両儀四象八卦底骨子）」とある。

3　河図洛書にみられる「義理」については、拙稿「朱熹「河図洛書」解釈『易学啓蒙』「本図書第一」の分析」（『白山中国学』通巻二十三号、二〇一七年）を参照。

キーワード：朱子学、易学啓蒙、象数易学、占筮、安東省菴